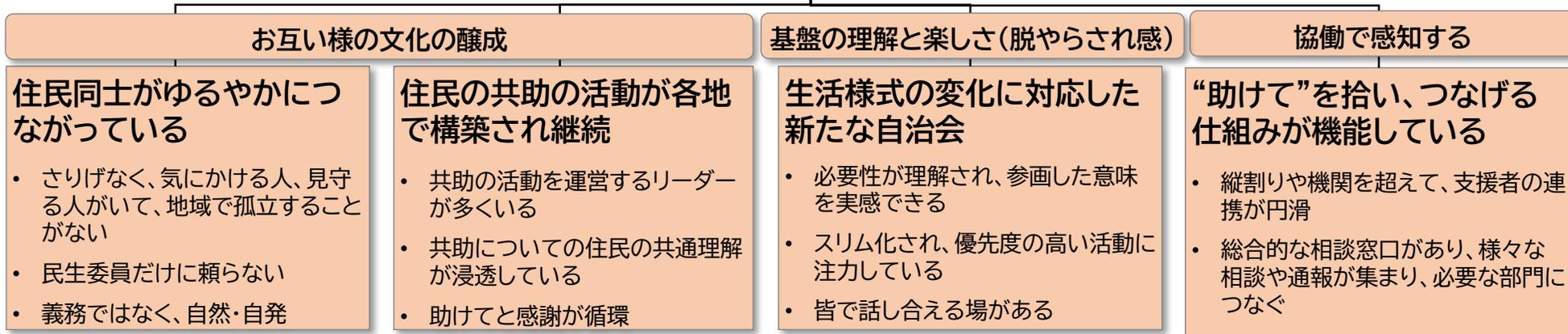


「10年後のありたい姿」は

ゆるやかなつながりと、感謝が循環するお互い様文化で、住民同士で日常生活の基盤を作り、困りごとに動いていけること

です

この「ありたい姿」の実現には、



の実現が必要です

【ワークショップの概要】

- 高齢者が増加し、自立した生活に不安を抱える住民が増えるが、共助・互助の網を広げようと仕組み化することには限界がある。今一度、共助・互助の必要性を確認し、多くの住民がゆるやかに・さりげなく、他者を気にかける、見守るような雰囲気、地域づくりを進め、お互い様の文化を醸成していくことこそ、重要である。
- 住民主体の団体によるケアの活動などを活発化させるには、リーダーと担い手が必要であり、育成確保が必要であるが、活動を始める人や団体の足をひっぱる風潮もある。困った人が活動者・担い手に頼り、多くの人が感謝し支える循環をつくりたい。
- 現在の共助・互助には、自治会が多く動員されているが、すでに多くの仕事が集集中であり、役員は高齢化、住民の多くも生活に追われ関与が減っている状況。このため「やらされ感」が募り、前向きに推進されない状況がある。今後、自治会を現在の生活様式にあわせて改革し、スリム化と優先課題に重点化していくことが必須。
- また、住民と行政、行政間、行政と関係機関において、困っている人や助けてを拾えるような相談窓口、通報・連絡先の共有などを強化して、円滑化していくことで、暮らしの安心を実現していくことが必要である。

